

是先師以寬政丁巳之春、所賜余之手書。事狀詳悉。蓋儼然一編米沢紀行矣、書到之初。柳川致仕大夫今村子共適訪余廬、余出示之。子共觀而大喜。感稱不已。遂請數日之借袖帛。子共好善。蓋寫而傳之于人、厥後写々相承數年間。我四隣侯国之讀書好道者。往々皆傳之云、先師没去。今十有七年。而此書則二十有一年。嗚乎旧矣、先師賜書余家甚多。而此牘尤深感人、謹裝以胎之于子孫。

文化十四年冬十一月 樺公禮拜

新年恭喜猶甚寒候得共、御揃弥御安福ニ殊更今春ハ
令女孩笑、御交々目出度御迎陽可被成と、重畳目出度奉存候。

小館中老少無恙致加年候、御安意可被下候。

一 去年追々御詩書、節々無滞致拜見大キに慰遠念申候。

貴校も追々御造立落成の由、賢勞ニハ候得共、扱々恭悦の御事

御本望の趣致遠察候て、於愚老も大慶不過之候。近年

列国追々校舎取立テも相聞候。其内半ハ愚老常々参り候

諸侯家造立の功も追々致与聞候て、本望の事ニ存候。

貴邦ハ猶更足下御取立の事、心底致喜悦候。此上勤学の

主法等無御油断御心掛被成候様ニと存候。兎角急ニハ不参事ニ

候間、永久の所ヲ專ニ御議シ被成度御事ニ存候。

一 愚老去八月廿五日、東都致發足候。此行ハ偏ニ米沢今候、老

侯への孝心より事起り、久々御面談も不申、老侯常々遥念

不已候付、今侯其所ヲ甚勞念有之候て、急度市谷へ願達

有之候付、市谷ニても甚孝心ヲ感心被致候故ニ、乍大儀下向候様ニ

被申渡、日限の儀も彼地の用事相濟候迄ハ心次第ニ逗留致候様

にと、細々被申含、元来生涯ニ今一度老侯へ対面いたし度本心、

下悩に相叶候付、七十老ヲ忘レ、百里の旅行も存立候事ニ候。

途中介抱の為ニ、服部吉弥ヲ被添、日々の取計ひは内田吉左衛門

と申、勝手方の老吏耄人、行旅の事ヲ司り、轎夫共迄、

謹慎の者ヲ撰ミにて、愚老ハ門生上田雄次郎、菱刈卯三郎

兩人、介抱ニ同道、隨身の家来ハ那須良助、鎗持草履取

兩人、其余の持人雑人、何レも彼家の謹直者計ヲ被附候付、

扱々道中も賑々敷自基之堂之態、吟咏歌笑、楽敷事ニ

御座候。両生の内も、上田ハ東都人にて、山野の風景ニ逢候ヘバ、

躍り候て日々勞ヲ忘レ申候。日光の左右ハ元来足下歴遊

の地、所々にて御噂ヲ申、此所同携不致事ヲ恨ミ申候。刀称川

以東駅々にても、逆旅主人往々志有之者も御座候て、米沢

聖君様の御師匠様と申唱へ、逢ニ罷出し者も多く、霄ニ

参り、又朝ニ夜ヲ込メテ、途中迄礼服にて送り候者も有之候。

依之米沢候の徳、隣国ニ布キ申候様子、共致感心候。十一日振の

旅行、九月五日ニ南境板谷関ニ至り候所、国校の督学提学
近來

督学ニ
被改候神保行簡前日より罷出、以命勞し申候。其余吏人も

多く差出し被置候。翌六日ニ嶺ヲ下り、府城より、三里大沢

と申駅ニ至り候所、老侯親敷郊迎の沙汰相聞候付、急ギ候て

八ツ過に羽黒堂と申地ニ至り申候。此所ハ南郊一里五六丁も

府城ヲ距り申所ニ候。最早侯の儀衛遙ニ相見候付、五六丁

轎ヲ下り歩ミ申候所、普門院と申寺の門前ニ、両傍ニ雲從

俯伏、侯ハ路の中心ニ立テ被相待候。進て拝し申候所、愚情ハ

地ニ手して拝度存候得共、侯の態度左候ハバ、地ニ手して

答拜可有之様子故ニ、無是非、足跣ニ手して拝し申候。先

何の言もなく、老涙満顔ニ御座候。候も一向無言にて涙

满面、先生御安泰と計にて、御案内可申とて、寺門ニ被入候。

外門より中門迄、足指仰ギ申候。三丁計の坂ニ御座候。連歩ニ

シテ進ミ申候。中々一步も前行ハ無之候。杖ヲ被進メ候得共、

辞して不杖候間、若やつまづきも可致哉との心遣と相見え、

手ヲ引又計ニ比肩して被進候。堂ニ上り候節、御案内と被申候て

階ヲ上リ、堂板ニ座し、俯伏して被待候。夫より座に上り候時、是ハ

例御存知の通、辞讓久敷候て、漸対座ニ相成、ソロソロ言も出テ

候て御互ニ及言語申候。杯進ミ候て例の通進ジ申候て、献酬も

相濟候。国老菰戸六郎兵衛九郎兵衛
事改名ハ、今候の命を以同敷

是迄郊迎、勿論整儀候て礼容深切ニ候。扱駿河守殿其外

諸公子よりも、名代の使者皆礼服ニて是迄罷出候。大老侯ハ

其節丹泉ニ入湯ニ付、附の家老一人使者ニ被差出候。今日

近傍の村民無老少、田畔ニ伏シテ儀ヲ觀申候者、嗚呼の

声計斗にて皆々落涙歎泣の声啾々と聞え候得バ、侯の

徳民心に感戴の所ハ、是にて相知レ申候。於是愚老なる者、

豈可不泣乎、豈可不泣乎。

一御案内可申とて老侯發駕直ニ引続キ尾して府城ニ入り

申候。都城の民満途、老侯の儀衛を拝觀し、並ニ愚老ヲ見

申候て是又嗚呼の声不断耳候。旅館ハ三ノ丸内老侯の
隠館より三丁計も有之候。奥山良助と申侍、近比家作ヲ
致直し屋敷も手広く家も甚調ひ申候宅ニ御座候。此人
願出候て愚老逗留中の旅館ニ被抑付度、甚殊勝ニ被存
右屋敷ヲ明渡し旅館ニ被定候。愚老衰年泉水を好ミ申
候段被聞及候て、新に右庭中に泉池ヲ被築、流水潺湲中々
をもしろく候。但し日々多忙、右庭中へ下り致逍遥候事ハ
只一度ニて御座候。

一館ニ至り候前より国老中条豊前、竹俣兵庫以下の長有司
皆々礼衣嚴然待迎へ候て、慰勞無所不至候。諸公館より着の

悦の使者不断門候。其夜ハ半バ甚勞し申候いき。

一翌朝改て、老侯より使者を以被勞、並ニ請し被申候付、四時ニ
隠館へ罷出候所、門ニ見次ギの者兩人相待、愚老旅館ヲ発し
申候相図ヲ報じ申候て、愚老門ニ入候得バ附の用人両三人、
玄関式台ニ出迎ひ、取次ハ下座ニ待申候。入座敷候得バ老侯
麻上下、外宮三ノ間迄御出迎にて、御自身前導有之、直に
奥座の間へ案内にて賓主ヲ分ケ、例の対座にて、先々
笑泣談ニ及び、夫より料理出候て、馳走無所不至候、灸ハ御自
身被引候。例の通、杯ヲ遣シ申候て、諸有司奔走、八ツ過迄
飲宴、夫より左右ヲ退ケ、精密の言談ニ及、国事共先々

荒増質問有之、学談ニ及、今日ハ勞シ可申とて、七ツ比ニ致退出候。送迎如常、痛入候事共ニ御座候。帰館後直ニ以使者、仍几一ツ蒲席一ツ小杯一ツ被贈候。命ニ御老年の儀、勞疲を甚恐レ申候間、此几ニより此席ニ座し誰ニ逢候共、必々席ヲ離レ、几ヲ退ケ等の儀ハ、決して無御座様ニとの儀、杯ハ近年小杯ヲ御好ミの由、是にて心儘ニ御用候様ニ、几ハ高低心ニ叶ひ不申候ハバ、又々可申付候、蒲席ハ国産の蒲にて、新ニ柔に織セ置候由、養老の意無所不尽候。又命ニ此度御下向ニ付、老臣共初メ皆々日々罷出候、起居可申候。先生より御出の儀ハ決して御無用、此段兼々老臣共へも申付、其外家臣一統ニ右の段申渡置候。大老侯の宮、諸公子へも同様、是ハ此方より日限ヲトし、御請じ可申との儀、其内二三老臣も参り、安否ヲ問ひ、夫より廿年の心事ヲ談じ、元来弟子の儀ニ候得バ、無残處愛敬、老侯よりの被仰渡の通りニ、私宅等へ為挨拶罷出候事ハ、必々断ニ及申候由。皆々申聞ニ候。依之逗留中、三老臣及其余の大臣より、一統ニ日々来問ヲ請ケ候計にて、愚老ハ一向不参候。発足前ニ飲宴と申候て、三老へ一夜宛咄しニ参り、飲ヲ尽し申候。大老侯の宮へも兩日被請候て、参謁、大老侯七十七、涙ヲ垂レテ御悦ニ候。尽日馳走無残所候。当侯の弟三公子 駿河守殿 相模殿 遠江殿 是も追々

来問、自是ハ不参、立前ニ一度宛参り馳走ニ逢申候。

一中條豊前、竹俣兵庫、荏戸六郎兵衛三老ハ、一日ニ二度ハ参り候。一度不参日も無之、夜ハ四ツ九ツ迄、飲宴交歓樂敷事ニ御座候。其余新旧相知の諸有司、諸学生、日々来問、是又同断樂敷候。

一学館へハ着の翌々日、聖堂へ拝謁、諸学生と飲宴交歓致し候。一月二六日、二七ノ日終日罷出、昼前ハ大学ヲ講じ、昼後ハ詩文又ハ学事ヲ談じ申候。前学生、当学生数十人困饒いたし悦申候。右の外ニ町家ノ者願ひ出、兩日講談

四百人計頭分計 町奉行持て出申候。不相替皆々落涙疊ヲ

湿し申候。勿論例の通愚老も泣キ申候いき。学館へ出席

ノ日ハ老臣諸大臣も不残出席、学生何レも上達、志業

風ヲ成シ、見事の様子ニ御座候て、扱々樂敷事ニ候。上田、菱刈両生、諸学生と交歓、日々悦申候。此段余り長く相成候付、略し申候。余ハ御想像可被成候。

一老侯の宮へハ毎日昼過より参上仕、夜ハ早キが五ツ遅キハ四ツ過ニ帰館致候。時々三老も交り、何是例の国事に及申候。

老侯朝四ツ時より昼過迄ハ大老侯伺ひニ御出、一日も怠り無候、其間四丁程有之候。日々の伺ひ陰晴風雨疾風迅雷、決して不参無之候。扱も扱も至孝の性万民感戴。

先ヅ是が第一ノ君徳ニ御座候。大老侯も一日も老侯を不被見候得ば不樂候。仍之諸公子も同断、孝心感服致候。

老侯宮ニテハ日々孝経を講申候。附キの有司一統不及申、三公子も日々参会被聞講候。就中感心の儀は、当主の養子世子宮松殿、今年八歳、甚怜悯ニ御座候。

老侯宮中ニテ成育有之候。起居動靜言々行々、全く老侯の徳度ヲ見聞有之、御祖父様より外ニ難有人ハ無之と被存候由にて、いやはや驚入候。日々講ヲ被聴候得共倦怠の容色一ツも無之候。御祖父様同様ニ其位ニ座し、威儀容度儼然可見事ニ御座候。老侯の愛育教誨ハ

勿論、天性不及申候。直丸殿御事ヲ内心ニ存出し含涙候ひき御遠察可被成候。老侯の徳はとても筆紙に不尽候。仍之略し申候。

一領内の美事不遑枚挙候、孝悌力田風ヲ成し、有司ハ安然として慰勞スルノミニ御座候。此儀ハ、上田菱刈見聞泣キ申候計ニ御座候。生育の世話も行届キ、今ハ一民も子ヲ不育者無之候。不思議の事ニ候。帰府の上、市谷にて此事ヲ申述候得バ、是計にても明君なり、大功哉大功哉と称美被致候。甚三郎も嘸嬉敷存じ候ひつらんと悦被申候。

一泉氏の婦病歿没の儀、早速早便ニテ被告候。愚老ハとても

覺悟、已ニ八月末ニハ参り候て、永決いたし候得バ、別て痛心も
不致候。乍併老侯ヲ初、老臣以下一統の悲哀ニテ、扨々却て
哀を添へ申候いき、老侯は赴ヲ被聞候と、直ニ哭泣、先生の
心中如何計とのミ被申候て、左右従臣も是を甚愁へ申候。
別て竹侯、莅戸兩人ハ参り吊シ候て、愚老よりハ甚の落涙、
其余の深交諸子、勿論いやはや迷惑いたし候。仍之三日
過忌明ニ付、強て老侯ニ朝し申候所、又々悲哀甚敷、是ニハ
度々迷惑御遠察可被下候。却て愚老不人情の態ニも相見
可申哉とこまり申候。乍併此場にて少しも痛ミ候得ば、
一藩中の愁ヲ生じ候付、実ハ齒ヲくひしびり、落涙ハ
不致候。情ハ見拙作候。
一三老を初諸有司の輯睦、見事成事不及申候。是にて
政事も行届キ申事と存候。莅大夫甚劇職中、文雅ヲ
不廢面白く相見え申候。竹大夫勿論中條も俗人ニあらず。
常々面白く咄合申候。神保学問ヲ上ゲ申候。督学用人ヲ
兼帯政談も多く此人ニ決し申候。片山紀兵衛文職ヲ転
じ郡奉行ニ相成候。米沢にてハ要務の職ニ御座候。御預り
所の人民難取扱諸国一般ニ候所、此人郡奉行ニ相成候得バ
じつてい早繩も入用ニ無之、民心甚和ギ申候。人ヲ被用
候事不堪感心候。

一五十二日逗留、雪も降り申候付、是非ニ断り十月廿八日米沢ヲ
發し申候。当日老侯、駿河守殿、莅大夫ハ当主の命を以、又
羽黒堂迄如前、郊送の儀衛儼然、新旧相知一統ニ送り
申候て、一里余南郊羽黒堂にて別レ申候。老侯ヲ初一統
の落涙御遠察可被成候。神保ハ送りの役人ヲ引連レ、命を以
板谷関迄送り申候。別離の態、御想像可被成候。生涯最早
再遊ハ無之地、山川遼落、鎖魂言語同断御座候。十一月九日
東都ニ着キ申候。桜田より迎使、千住迄罷出、一崖小館へは大夫、
中庶子兩人待居申候。丁寧不及申候。僕も生涯の仕舞
旅行、供廻りも本格の通りにて、馬も為引申候。少々俗吏の
態ハをかしく御座候。

一九日夜ニ入り帰着に付、翌朝市谷第二朝し申候。君上も早速
奥座へ被召出候て寛々慰勞、米沢物語ニ相成、一時計咄しヲ
被聞候て、喜色不大方候。退出の時、諸老臣用座へ呼出し、
又々同様ニて長物語リニ相成、八つ過第を出て、近辺官長
廻勤いたし、暮ニ致帰宅候。門人群集八ツ比まで咄し申候。翌
十日朝山田平次罷越今日ハ当主御礼ニ市谷へ参上の序
直ニ、高館へ被参筈と申聞候付、大キニ取込候て、被是掃除申
付候内ニ、儀衛儼然、米沢侯麻衣裳駕籠側ハ麻上下、
ドロドロと御入来ニ候。直ニ奥ノ小座敷へ請じ申候。中々賓座

にハ就間敷、愚老客座ニ就キ候様ニと、例の恭遜辞讓時ヲ
移し甚こまり申所、中庶士須田多仲、却て先生ヲ勞し
候事、如何御座候と申述候付、漸対座へ御上り有之候。此度
先生ヲ遠国へ招待の御礼、市谷へ今日申上候。随て直ニ罷出、
御礼申上候との儀、辞謝反覆、丁寧痛入候。銀綿端匹酒
肴、表座敷へ備へ、座ニ満ち申候。其内ニ家ノ鍛工へ被申付、刀
脇指二口ヲ新ニ被為鑄候て、持参ニ御座候。目錄は米沢侯
御自身ニ被相渡候。是ハ先例越候浜町へ御出の礼の通りニ
御座候。妻子姥迄被召出、懇ニ慰勞、各賜物有之候。塾長
召出シ、目錄ヲ給り候。随從両生^{上田}_{菱刈}も召出し謝辞有之候。
賜物ハ米沢にて有之候。何も供シ不申、吸物一ツ、御酒肴計にて
盃ヲ例の通進シ相濟候。夫より甚銳喜にて七ツ過迄物語
有之、御帰り有之候。愚老ハ玄関式台にて達て辞謝ニ付、
入り申候。駕ハ門中にて被召候様ニと申候得共、承知無之、
漸門の内シキミノホトリニテ、忤無理ニ請ひ候て上輿有之候。
礼ニハ決して不参様ニ、急度御申聞ニ付、無抛十四日ニ初て
桜田へ参り、尽日交歓飲宴罷帰り候。市谷邸中ハ不及
申、隣里を赫灼いたし、きのどくなる事ニ御座候。山村伊勢守
よりハ、家来ヲ遣し、急成事ニ候得バ不都合ニ可有之候間、
何にても手伝可申由ヲ申聞候。一統珍敷がり申ニ付、世の

儒教の季世ニ及申ヲ歎じ申候。有間敷事ニも無之候。已ニ
浜町小屋へも父侯ハ御出にて有之候イキ。但し当侯志ヲ
被継候事ハ感服いたし候。

一上田菱刈二生ハ仕合者ニ御座候。米沢にても客遇丁寧なる
事ニ候。老侯宮中へ被召出目見有之、丁寧ニ慰勞有之
料理ヲ給り目錄も玉り候。十日の暇ヲ与へ奥の松島へ
遊覽為致候。然所、米沢ヲ離れ他領へ罷越候事、道中無
心元由にて、僕壺人給り、馬一匹ヲ被供候て、御馳走にて松島ヲ
見て帰り申候。此段ハ二生生涯ニハならぬ遊賞、東都館中の
門人とも甚ねたましがり涎ヲ流し申候。

以上

此度の北行、前後の次第、記録シ置可申と存候處、著後
事ヲ了シ候て、散々風邪、十七八日平臥、ソリヤコソ旅疲など
医師ともさわき申候得共、何の苦もなく解熱、ソレヨリ漸々
快復、飲食常ニ復シ、此節ハ全人ニ相成、年始も元朝暁七ツ
より出仕、諸方廻勤も大方昨日切りニ済し申候て、今日は
此書ヲ認メ申候。御安心可被下候。今年の御出府も無心元、
又明年ニも可相成哉。扱々老心ハ是のミ愁へ申候。世儀々々
忍心哉と妻子共と常々申暮候。面談ニ代へテ此書ヲ
認メ申候。書読ニ可致と存付候へ共、ソレモ面当、足下計

一見アレバスムことと、俗書ニテ申遣候。広く他見ハ御無用、御口語ハ御勝手次第ニ御座候。

一泉も甚よわり申候得共、諸侯家礼遇甚厚く、去年忌

明後日々他行、娘ニコまり申候。妻折々参り致看顧候。

好婦も有之様ニ相聞へ申候。春の内ニハ継絃の積りニ

御座候。扱々老人是ニハ氣ヲ痛メ申候。妻儀愚老同様ニ

足下の東行を相待申候。春寒御自愛、令女育成の

御手当可被成候。遣度物も有之候得共、扱々遠国、便りも

不自由不任心底候。令内へも宜御申述可被下候。

一巴太仲罷出隨身、好書生ニ御座候。御安心可被下候。何事も

後便と草々御祝詞申納候。頓首。

正月四日

紀徳民

世儀樺賢契

梧右

猶々米沢にて保督学とは常々御噂、保生も西望

いたし候。已上。

先師平洲先生国牘跋

平洲先生之学之德之大、世尚有知与

不知、我侯屈致之千里者三区々唯恐

失其礼、且敝邑之事、一無可觀者固矣

而駛虚声乎大方君子、慚愧何勝、雖然

先生之親我侯、亦豈常尋行路之人耶

經年所者二十余、久矣哉先生曾有云、

樺世儀助吾者也、信哉言也、一卷之国

牘執而讀之、一字一涙、使人慨焉、憶往

日先生而有知、不亦咲泣九閔之上耶、

文化十五戊寅清明前一日七十六翁

神行簡拝

此ふミハこたひ遺草輯録のことを聞及ひ

て、世儀男子述はるはるとうつつしかハシ

ければ、ここに録し出すになむ

先君子平洲先生国字遺書、存篋笥者

若干卷所応于諸侯及諸子需者十居

七八焉、辞世已久矣、人或借去、間有散
逸、余每憂之会旧門生来集、語次及之、
僉曰、隻字拱璧、不可不重、假令借者愛
護、亦恐轉写之誤、胎瑕於夫子、不可知
也、私刊而眎之何如、余甚然之於是

斯举匪敢公諸世也

天保乙未歲仲春

男 德昌謹識

門人西條 上田節書